

《研究ノート》

弘経要義考

——優陀那和上の教化学——

三原正資

(現代宗教研究所囑託)

宗祖の示された五義(五綱)は「聖人の宗旨建立の教判であるが、同時にそれは仏法弘通における五大要綱でもある」(『宗義大綱読本』)とされる。近年提唱されている教化学は、この五綱判の精神を踏襲したものである(「現代宗教研究」第二十四号所収 石川教張「日蓮宗教化学の研究を」、同第二十二号所収 赤堀正明「新宗教調査報告」)。宗祖の五綱判や天台五時八教判においては、教法と教化は不可分のものと考えられているが、教化学は、教化の場における教法と教化方法を考察して時代に対応する教化方法の確立を目的としている。

本稿では、幕藩体制という近世の歴史的状況に応じた教化について考察した『弘経要義』(『充洽園全集』第三編所収)を読み、高度情報化社会といわれる現代の教化の諸問題を考えるよすがとしたい。『要義』は大意・破立・悉檀・本迹・教観・三軌・機根・五種・正助・三秘の十章で構成され、『宗義大綱読本』第七章(弘経の方法)の所説は本書を承けついでいる。

教化とは何か

優陀那和上は出家・在家の位（役割）のちがいを述べて、教化（『弘経』『利他』）は師である出家者の務めであり、教化者は教化方法に習熟しなければならないとしている。だが、実状はどうであったのか。当時の教団の現状を、和上は「今時僧徒進ハ無ハ修ハ学ハ護ハ法ハ大ハ志ハ、退ハ無ハ但ハ信ハ口ハ唱ハ道ハ心ハ」（『首題要義』一一三五頁）と、在俗の信徒にも劣る僧侶の退廃を記している。

この教化は出家者の役割という考え方は『宗義大綱』に継承されているが、現代の我々は、教化についての認識を改める必要がある。現代の新宗教は、「一人一人が布教者」「相手の話を聞くことが布教」（『現代宗教研究』第二十二号所収 妙智会理事小林永司「教化の問題点」）であるとしている。新宗教は在家・出家、自行・化他の区別、すなわち布教・教化の概念を拡大することによって発展していることに注目したい。

さらにまた、東欧情勢の急激な変化に果したTVというメディアの役割が大きかったように、高度情報化社会においては教化のメディアについて検討することが求められ、すでに「伝道とか教化とかいっているのも受け手にとって情報は情報の一つ（中略）教化とは、言葉や文字だけではなく環境のすべてにおいて考えられ、施されなければならない」（『日蓮宗新聞』一九九〇年九月二十日号 赤堀正明）と指摘されている。すなわち、宗教を「一つの総合的演出体系」（『情報産業としての宗教』）とみなして、その体系の一環として教化を考えなければならないのである。法華経（随喜功德品）は五十展転随喜の功德を説いている。それは速やかにして無限の情報伝達を象徴している。それならば一層、われわれは教化の概念を拡大して考える時であろう。

教化方法を選ぶ

「情報は簡単・明瞭に。言いたいことは一つにしる」が広告の原則である（平成二年度教化学研究集会 石川哲也「宗教と広告」）。これによれば、唱題や四箇格言を生みだした宗祖は卓越したコピーライターであったといえよう。

簡潔（教化を情報の伝達とみた場合）、これが教化の条件である。伝達される情報は簡潔である時、相手に最も正確に伝わるのである。教法を情報とみた場合、本宗の教法は果して簡潔なメッセージであろうか。

和上は、浄土念仏の簡潔な宗旨と比較して余りに複雑な本宗の教法を指摘して、「今経則不然。開權顯実・化導始終・師弟遠本・二乗作仏・悪人女人成仏・本化迹化流通、是教門不二、而其行亦多。雖復挾取要而心期成仏、口唱経題、本尊兼三宝。約理雖不二事則多相（中略）況有結縁有当成有即成、定期何等。心処不純、因教数惑（中略）宗祖雖專、募唱題亦不遮止弟子檀那誦誦（中略）身延・池上・光山・龍華・中山門流分派互不統攝。況論勝劣一致、淨受不受、法界未靜乎」（『綱要正義』三一―二四六頁）と述べているが、ここには本宗の教法と教化方法の複雑なありさまが鮮やかに示されている。これは、仏教全体を開會する法華經の本質に由来するものであり、そこで神力品に「於如来滅後 知仏所説經 因縁及次第 隨義如実説」と説かれる所以である。そして、この経説に依る五綱判によって、種々の教法を究極の目的に向う全体構造の中に位置づけて、ある状況の中で最も適切な教化方法を選ぶ必要が生じてくるのである。

和上は、第二章（破立）において五綱を考察して「弘經有進退」（三一―二頁）と、このことについて述べているが、以下、具体的問題における教化方法の選び方のポイントを、本書に学んでみたい。

(一) 〈このごろ万遍唱題行が盛んであるが、宗祖は正法の受持を勸奨されたのであって、あたかも百萬遍の念仏の如く行ずることが祖意に叶うのであろうか〉

唱題の意義について、和上は第八章（五種）で「如唱題妙行其相雖似誦誦祇是受持之法耳」（三一―九頁）という。すなわち正法受持は唱題行として示されるのであって、『報恩抄』に「一同に他事をすてて南無妙法蓮華經と唱べし」（定二―四八頁）とあるのはこの意味である。そして第九章（正助）では「約化他則雖今時以解説為正行、約自行則經白利鈍概以唱題為正行也」（三一―一八頁）と述べて、正法受持は自行としては唱題行としてあらわれ、化他において

ては「解説」として示されるべきであるとの見解を記している。すなわち、正法受持は今の時代の社会的活動（教化）としては「解説」としてなされるのが最も良いと考えたのである。この例に則って、さきの問題を考察してはどうか。日本山妙法寺の藤井日達師は口業正意の但信唱題論者であるが、その師にして、現代の仏教としては世界平和に力を尽すべきであるとしたのである（「現代宗教研究」第二十一号拙稿参照）。このように、信仰の表現・教化方法の選択は原則に立ち、状況に応じることが大事であり、次元の異なる問題を同一面上で論ずるべきではないのである。

(二) 死後生すなわち霊の問題こそ、現代においてもっともトレンドリーなものの一つであろう。仏教各宗は葬祭を通してこの問題と関わりながら、真剣に取り組んではいけないようである。

教団が葬祭を主務とするに至った原因は、幕藩体制下の寺檀制度にある。和上はこの制度にふれて、「今世の王法にては出家は在家の死人をあらため変死のなきやうにたゞしたずね、また葬礼と祭儀（忌日年忌の法事なり）とを引うけてつかさどりつとむる役人に御定なり。仏法の本意にはあらず」（五一六二頁）と述べている。しかし明治時代における近代合理思想の流入と教団の近代化は葬祭の形式化を招き、教化方法としての実質を失なうことになったのではなからうか。この状況の中で、先祖供養という教化方法によってこの役割を継承し、発展したのが新宗教であるといえよう。われわれは今、葬祭の本質を死後生と霊の進化（成仏）の問題として把え、これを学知的に認識すべく努力し、葬祭の教化方法としての意義を確立しなければならないのである。

さて和上は第三章（悉檀）で、四悉檀によって教法・教化方法を分類し、世界悉檀（三世因果十界依正善悪差別法門）・為人悉檀（諸為人勸善法門）・対治悉檀（諸誠惠法門）・第一義悉檀（妙法実相法門）の中では、葬祭を為人悉檀に配当して意義づけを試みている。四悉檀は世界・為人・対治を次第差別法門、第一義を円融平等法門とみることもできよう。この二法門は、法華経においては九權一実從因至果の迹門、九用一体從果回因の本門に当り、和上は第四章（本迹）で「唯一妙法具足本迹二徳」（二一五頁）と述べて、一切の法門を法華経に摂めている。

近代合理主義に呪縛されることなく新たな学問の地平を拓き、しかも本迹二門を活用して、葬祭を三世次第成仏門として見直していくことが、われわれに課せられているのではなからうか。

(三) 四諦の法門を活用する立正校成会に対して、なぜ小乗の法門を用いるのかという声がり、また本宗内では通仏教的とか本化の独自性ということが批評の中に出てくることが多い。教化活動の中で、これらをどのように考えたらよいのであろうか。

「宗教、特に新宗教の場合（中略）情報価値だけが売り物であるとなると、何よりも自分の独自性と他の宗教との差異を強調しつづけるほかはない」（小田晋『宗教集団に学ぶ企業戦略』）という意見によれば、発展をのぞむ宗教は教相主義（独自性と差異の強調）を掲げる。和上も第四章（本迹）で、台当本迹の異目を弁まえばこそ「弘通始^可得施^ヲ焉」（三一六頁）と述べている。しかし、独自性の内容を明すことを観心というならば、観心なくしては教相主義も本来の意義をもたないのである。和上は第五章（教観）において教・観と教化にふれて、「佐前化導教相^ヲ為^ス専^ト。佐後弘通観心^ヲ為^ス主^ト（中略）説者^ユ当^ル知^ル、以^テ他門^ヲ為^シ機縁^ト則^チ直^ニ以^テ教相^ヲ為^ス先^ト。以^テ自家^ヲ為^シ対告^ト則^チ直^ニ以^テ観心^ヲ為^ス主^ト」（三一六頁）と述べる。すなわち和上は、他宗徒に対しては教相主義をもつてのぞみ、同門の徒に対しては観心主義の法話を用意しなければ、化導がうまくいかないのである。

これは、相手に応じて情報の内容を変えろという方法論である。『本尊抄副状』には「秘之」（定七二二頁）とあるので、むしろ秘密にすべき情報もありうるわけである。広告業界の「ターゲットを知る」「欲しい人に欲しいものをあげる」「我々と競争するものは何か」（前掲石川哲也）ということばも参考になる。要するに、法話（情報）の内容は方法論的に決定されるものであり、教化とは戦略的思考の上に成立するものである。

今後、宗教の国際化が進むにしたがって、各教団の意図的な情報戦略に対抗していかなければ、「権実二教のいくさ」（定七三三頁）を進めていくことはできないと思うべきである。

教義の現代的解釈としての「解説」

単にモノを売る時代は終わったといわれている（世界の経済的南北問題は一応措いて）。企業は新しい価値観やライフスタイルを提案し、人々がそれを受け容れることによってモノが売れると考えている。宗教にとって本来は（墓地などではなく）価値ある情報が売りものである。

和上は本書第七章（機根）第九章（正助）において、教化における「解説」の重要性を力説しているが、われわれはそれを、教義を役に立つ情報（口）・真に必要な価値観（意）・新しいライフスタイル（身）として人々に伝達することであると捉えてみよう。例えば宗祖の「立正安国」とは、それをあらわすすぐれたことばであると思うのである。しかし、現在、本宗の「解説」は種々の問題をもっている。

(一) へ本宗の出版物は、わかり易いことばを使っても理解しにくい

中央教研の霊友会訪問研修の時に配布された霊友会のパンフレットを自坊の檀信徒に読ませたところ、「理解しやすい」と答えたことに触れて都龍張師は、「霊友会では仏教用語を平易なことばにすりかえていただけではなく、けっこうむづかしい用語も使っている。しかし、それが読み易いのは、執筆者の宗教的体験が根底にあって、読者はそれに共感し体験を共有するから解り易く感じるのだろう」と述べている（本年度広島管区専任布教師会研修会「教義の現代用語化について」）。これによれば、教化者は教義の実践としての自己の体験が人々に共有されたときに、「解説」が成立したと考えるべきである。

和上は第八章（五種）で「解説」とは、勸誠示道・権実弁教・三秘識宗・妙解決信・唱題立行・聴聞助信・緇白護法・世出相資・現生得福・来果成報の十意を説くこととしている。この中で勸誠示道、いいかえると「なぜ宗教は必要か」を説くことが重要であると思う。この点についての説得力は、新宗教がはるかに勝っていると考えざるをえな

い。

(二) 〈ことばにメッセージを託す〉

もちろん解り易いことばの方が良いが、そのことばが時代の思潮を象徴し人々の感性に響くことが大事である。一例を挙げると、「生命」という用語。仏を指すものとして「永遠のいのち」などと使われるこの語は新宗教によくみられ、「宇宙の根源の真理は、とうぜん大聖人御自身の生命そのもの」(『創価学会教学基礎教典』)、「〈仏〉とは、宇宙の大生命(中略)真理であります」(庭野日敬『仏教のいのち法華経』)と用いられている。因に仏を宇宙の生命とみることを、和上は妙法五字法界為体説として批判している(『首題要義』)。しかし『本尊略弁』にみられる事觀の生態学的説明は生命論に通じるものともみられるのである(『現代宗教研究』第二十二号、二十四号拙稿参照)。

新宗教は「仏」という語の代りに「宇宙の生命」という語を用いることによって、宗教は科学的世界觀と調和している、そしてあなたの生命と大いなる宇宙の生命は一つであるという肯定的人生觀を、大衆にメッセージすることに成功したのである。広告の原則の一つは「オンリーコネクト」(「ただつながることができれば」前掲石川哲也)であるが、コネクトするためには、このように、教義を解釈してことばを創らなければならないのである。

(三) 〈メッセージに責任をもつ〉

「仏教の慈悲の教えも(中略)その精神が現在の日本社会に根づくほど力をもちませんでした」(ライシャワー『日本の国際化』)という指摘にわれわれは耳を傾けたい。現在、新宗教、既成仏教を問わず、生命論的自然觀にもとづく環境問題への提言が多くなされているが、社会の動向に対する歯止めにはなっていないようである。なぜ無力なのかを反省しなければなるまい。もしかすると、宗教者はその甘いメッセージによって、人々の欲望の成就を煽りたててきたのではなからうか。教団の拡張だけが目的になっているならば、宗教の企業化と評されても仕方ないであろう。歴史的・社会的な教団の存在理由について、いま一度反省するときであろう。

翻って考えてみるに、弘経の方軌を定めた五綱判は、仏教者が時代状況を考えて正しく教えを宣べているかどうかを問題にしたものである。また、本書の冒頭に和上は「凡欲^上伝持^中妙^下經^上弘通^中仏道^上者、宜^上先^中自^下知^上其^中位^上。位^上有^中師^下有^上弟子^中」(三一頁)と記している。教化にたずさわる師とは、宗教の歴史的・社会的責任の大きさを自覚したものであるが、お題目総弘通運動はそのような人々によって荷われなければならないのである。

※本稿は平成二年十一月十六日第四十三回日蓮宗教学研究発表大会で発表したものである。